

Title	否定と呼応する副詞をめぐって：実態調査から
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	大阪大学文学部紀要. 1999, 39, p. 69-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4002
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

否定と呼応する副詞をめぐって

— 実態調査から —

工 藤 真由美

1 はじめに

(1) 現代日本語の動詞、形容詞、名詞述語には、次のような、肯定形式と否定形式の対立、つまり<みとめ方>の文法的カテゴリーがある。ただし、存在動詞「アル」には、「*アラナイ」という否定形式がなく、形容詞「ナイ」が、意味・機能的に対応する否定形式としてふるまう。

	動詞述語	形容詞述語	名詞述語
<肯定>	アルク / アル	サムイ / キレイダ	コドモダ
<否定>	アルカナイ / ナイ	サムクナイ / キレイデハナイ	コドモデハナイ

そして、副詞のなかに、文法的否定形式と呼応するものがある。（*は非文法的であることを示す）

- 決して行かない。（*決して行く）
- まさか子供が犯人ではないだろう。（*まさか子供が犯人だろう）
- とうてい出来ない。（*とうてい出来る）
- 会議がなかなか終わらない。（*会議がなかなか終わる）
- ちっとも寒くない。（*ちっとも寒い）
- まんざら好きじゃないこともない。（*まんざら好きだ）

しかしながら、以上のような否定と呼応する副詞のほとんどは、否定であればどのようなかたちでもいいわけではない。

- ・彼にはとうてい（とても）出来ない。／*彼はとうてい（とても）しない。
*彼はとうてい（とても）犯人ではない。
- ・会議がなかなか終わらない。／*会議はなかなか退屈ではない。
*彼はなかなか犯人ではない。
- ・彼はちっとも学生らしくない。／*彼はちっとも学生ではない。
- ・まんざら好きじゃないこともない。／*まんざら好きじゃない。

一方、「決して」は、このような副詞のなかにあつて、最も様々なタイプの述語と共起するものである。従つて、使用頻度が最も高い。

- ・決して行かない（動詞述語）／決して退屈ではない（形容詞述語）／彼は決して犯人ではない（名詞述語）
- ・1日では決して出来ない（叙述）／もう決して行かない（決意）／決して行くな（禁止）
- ・決して成功しないだろう／決して成功するはず（わけ）がない／決して成功したわけではない／決して行くべきではない／決して行ってはいけない／決して行けないことはない

いまだ中間的記述の段階にとどまるのではあるが、どのような述語形式と共起するかの観点から、否定と呼応する副詞を暫定的に分類・記述してみることが本稿の目的である。

（2）分析の手順として、新潮文庫におさめられている46冊の文学作品における使用実態を全例調査をした。

この結果、文法的否定形式との呼応率が100パーセントないしそれに近いものは、次のとおりである¹⁾。

決して (740例)	ゆめにも (39例)
少しも (424例)	ついぞ (36例)
まさか (246例)	いささかも (31例)
ちっとも (220例)	ろくろく (27例)
めったに (155例)	つゆほども (24例)
とうてい (129例)	まんざら (22例)
いっこうに (117例)	みじんも (17例)
たいして (112例)	これっぽっちも (11例)

二度と（104例）	もうとう（11例）
かならずしも（80例）	よもや（11例）
さほど（62例）	ろくすっぽ（11例）
ろくに（56例）	あながち（10例）
さして（50例）	

また一方では、肯定形式とも共起するが、否定形式と共起している例が100例以上と多いものは、次のような副詞であった²⁾。

とても、なかなか、どうにも、まるで、ぜんぜん、さっぱり、あまり、それほど、べつに

これらの副詞は、肯定の場合と否定の場合とでは、共起する述語のタイプが基本的に異なっている。

- ・1日ではとても読めない。（*一日でとても読める）
とても嬉しい。（*とても嬉しくない）
- ・先生がなかなか来ない。（*先生がなかなか来る）
なかなかいい。（*なかなかよくない）
- ・どうにも分からない（*どうにも分かる）
どうにも苦しい（*どうにも苦しくない）
- ・まるで分からない。（*まるで分かる）
まるで雪のようだ。（*まるで雪のようではない）

「それほど」は、肯定では文脈指示用法であるが、否定ではそうではなくなって「さほど」に言い換えることができる。「別に」は、肯定では「他に」という語彙的意味をもつが、否定ではもたなくなる。

- ・彼は泣き続けた。それほど辛かったのだ。（それほど≠さほど）
今日はそれほど寒くない。（それほど=さほど）
- ・（これとは）別に、いいやり方がある。
太郎のやったことは別に悪くない。

従って、本稿では、以上の32の副詞を対象に分析を行なうことにする。（「ろくに、ろくろく、ろくすっぽ」は文体差を除けば違いがないので、まとめて扱う。）

結論を先取りして言えば、概略、次のように分類し、記述してゆくことにする。

- | | |
|----|--|
| A類 | (A.1) けっして、べつに
(A.2) かならずしも、あながち、まんざら
(A.3) まさか、よもや |
| B類 | (B.1) とても、とうてい
(B.2) どうにも、なかなか、いっこうに
(B.3) ついぞ、二度と／めったに、ろくに |
| C類 | (C.1) さっぱり、まるで、ぜんぜん／夢にも、露ほども、もうとう
(C.2) すこしも、ちっとも、いささかも、みじんも、これっぽっちも
(C.3) たいして、さして、さほど、それほど、あまり |

A類の副詞グループは、名詞述語であっても形容詞述語であっても動詞述語であってもよく、述語のタイプに限定がないものである。

B類の副詞グループは、動詞述語に限定されていて、典型的な形容詞述語や名詞述語とは共起しないものである。(B.3)の4つの副詞は、「頻度」あるいは「実現の量的側面」に関わる点で、C類に含めてもよいかもしれない。

C類の副詞グループは、形容詞述語・動詞述語とは共起するが、名詞述語とは基本的に共起しえないものである。ただし、名詞述語とは言っても「美人だ、秀才だ」のような程度性のあるものは、C類の副詞と共起できる場合がある。

- ・彼女はちっとも（たいして）美人ではない。
- ・*彼女はちっとも（たいして）犯人ではない。

また、(C.1)の副詞は、「全面否定」を表す点で、(C.2)と共通しているが、特に「さっぱり、まるで」は、典型的な形容詞述語との共起が少ない点で、(C.2)とは異なる。また「夢にも、露ほども、もうとう」は、典型的な形容詞述語とは共起せず、心理活動・心理状態に関わる述語のタイプに限定されている。（動作や変化という典型的動詞述語とは共起しない点で、B類の副詞とは異なる。）

2 記述の前提

以下、具体的に記述していくわけであるが、次の点にまず留意しておくことが必要となる。

(1) 第1に、次のようなものは、形式上は否定であるが、意味上は肯定の派生形容詞とみなさなければならない。

くだらない、つまらない、おもいがけない、やりきれない、いたたまれない、ものたりない、たまらない、とんでもない、みっともない、あっけない、さりげない、なさけない、もったいない、あじけない、そっけない、たよりない、はしたない、えげつない、ふがない、たわいない、ごちない、やるせない、わけない、だらしない、もうしぶんない、もうしわけない

これらの形式は、派生形容詞化しているので、以上の32の副詞とは共起しえず、その否定形式と共起することになる。そして逆に、「非常に、ずいぶん、かなり」のような程度副詞と共起しうる。

- ・*決してつまらない／決してつまらなくはない
- ・*必ずしもくだらない／必ずしもくだらなくはない
- ・*ちっともだらしない／ちっともだらしなくない
- ・*さほどえげつない／さほどえげつなくない

- ・非常にだらしない／*非常にだらしなくない
- ・ずいぶんそっけない／*ずいぶんそっけなくない
- ・かなりえげつない／*かなりえげつなくない

(2) 否定接頭辞のついた語彙的な派生語とも、基本的に共起しない。(文法的には肯定であるので、「非常に不自然だ、ずいぶん無神経だ」のような共起が可能な場合がある。)

- ・*彼女は決して不しあわせだ。／彼女は決して不しあわせではない。
- ・*必ずしも社会状況に無知だ。／必ずしも社会状況に無知ではない。
- ・*ちっとも無理だ。／ちっとも無理ではない。

ただし、32の副詞のうち、「とうてい、とても、まるで、ぜんぜん」の4つの副詞には、次のような例があった。

- ・とうてい（とても）無理だ／不可能だ
- ・まるで無駄だ／無意味だ／無学だ／無感覚だ／無頓着だ／無知識だ
- ・ぜんぜん無学だ／没交渉だ／未知の人だ

(3) 次のような語彙的に否定的意味をもった形式がある。これらも、基本的には共起不可能である。

- ・*決して駄目だ／決して駄目ではない。
- ・*一人で仕上げるのはすこしも難しい／一人で仕上げるのはすこしも難しくない。
- ・*たいして（さほど）歌いにくい／たいして（さほど）歌いにくくない

ただし、次のような場合があった。基本的に「困難」「不可能」「欠如」「消滅（中止）」「拒否」「非同一性」に関わる語彙的意味をもった形式であると言えよう。

<A類の副詞>

- ・もう決して～するのはやめよう（よそう）と思った。
- ・必ずしも～とは言い難い。
- ・まさか～するなんて予想外のことだった。

<B類の副詞>

- ・とても（とうてい）駄目だ
- ・とても（とうてい）～しかねる
- ・とても（とうてい、どうにも、なかなか）～しがたい
- ・とうてい（なかなか）～するのは難しい
- ・なかなか（どうにも）～しにくい
- ・二度と～するのはごめんだ（こりごりだ）
- ・二度と～する可能性は薄い

<C類の副詞>

- ・全然駄目だ
- ・全然（まるで）違う（異なる／見当違いだ／間違っている）
- ・全然（まるで）別だ（赤の他人だ）

- ・全然(まるで) からっぽだ (空虚だ)
- ・まるで欠けている。
- ・まるでなくしてしまう (失せてしまう)
- ・まるで逆だ (反対だ)
- ・まるでちんぷんかんぷんだ
- ・全然素人だ
- ・まるで変わってしまった。
- ・全然断ち切られてしまう。
- ・まるで(さっぱり) 忘れてしまう
- ・まるでやめてしまう (よしてしまう)

「別に、一向に」には、以上のような場合はなかったが、次のような例が見られた。否定的意味が潜在している点では、以上の場合に連続していると考えることができる。

- ・それなら、別にいいけど。(いい=かまわない)
- ・何と言われようと一向に平気だった。(平気だ=気にしない)

(4) 次のような形式は、構文的に否定的意味になるがゆえに、共起可能となる。

- ・決して(二度と) 行くものか。
- ・まさか彼が失敗するなんて誰が予期しただろう？

従って、以下の具体的記述においては、形式上も意味・機能上も文法的否定であるものを中心に考えていくことにする。

なお、32の副詞のうち、実例数が50例以上で、(2)(3)(4)のような、語彙的、構文的に否定的意味をもったものと共起していない副詞は、次のようなものであった。

- (B.3)めったに、ろくに
- (C.2)すこしも、ちっとも
- (C.3)たいして、さして、さほど

「あながち、まんざら/よもや/ついぞ/夢にも、露ほども、もうとう/みじんも、これっぽっちも、いささかも」も文法的否定形式と共起した例のみであったが、実例数が少な

いので、断定しきれない。

なおさらに、副詞のなかには、次のように、連体用法、述語用法で使用されるもの、対応する連体詞があるものがあるが、意味・機能上ずれがみられる場合があるので、分けて考えることにする。

<連体用法>

- ・僕は腕力にさほどの自信がない。（*さほどの自信がある）
- ・かれはなかなかの人物だ。（*なかなかの人物ではない）
- ・ろくなものを食べていない。（*ろくなものを食べている）
- ・彼はたいした奴じゃない。（たいした奴だ）

<述語的用法>

- ・まだなかなかだ。（*まだなかなかではない）
- ・とてもじゃないが、1日ではできない。（*とてもだが、できない）

3 A類の副詞

(1) 「けっして」は、最も多様な述語のタイプと共起しうる副詞であり、構文的位置も自由度が高い。

<名詞，形容詞，動詞述語>

- ・そりゃその位の金はあるさ。けれども決して財産家じゃありません。（こころ）
=けれども財産家では決してありません。
- ・いくらかパサパサしてはいたが、決してまずくはなかった。（一瞬の夏）
=まずくは決してなかった。
- ・松田の顔は赤黒くなるが、決してどなり返したりはしない。（さぶ）
=どなり返したりは決してしない。

<ひっくりかえし文>

- ・世界を変貌させるのは決して認識なんかじゃない。（金閣寺）
=世界を変貌させるのは認識なんかじゃ決してない。
- ・しかし石井を選んだのはわたくしの意志で、決して母に言われたからでも沢田先生に言われたからでもごさいません。（草の花）

<モダリティー形式>

- ・老師に対する尊敬がそんなことを思いつかせたのでは決してない。（金閣寺）

- ・しかしね、決して不治というわけではない。要は体力をつけることだね。（塩狩峠）
- ・この仲間になにかを返さずには、決してここを出るわけにはいかない。（さぶ）
- ・奴なら決して間違いをしでかすはずはない。（楡家）
- ・決して死ぬはずじゃなかった。（焼跡）
- ・決して、そんなぺてんにかけたりするつもりはない。（砂の女）
- ・たとえそれがどんな結果に終わろうとも、決して他人に責任を転嫁しないでほしいんだ。（一瞬の夏）
- ・どんなことがあっても、決して相手になるんじゃないぞ。（さぶ）
- ・神様とはネバー・ファイト、決して闘ってはいけない。（一瞬の夏）

<決意、命令、依頼文>

- ・いや心配しなさんな。このことは決してほかへはもらしませんぞ。（銀河）
- ・決して懺悔しまいと思いつつながら、私の毎日には安堵がなくなった。（金閣寺）
- ・この間もあぶなく立ちそうにしたが、決して相手になるなよ。（さぶ）
- ・おれ達はこの責任を負って死ぬからな、お前たちは決して短気なことをして呉れるな。（銀河）
- ・女将さん、我々のことは決して口外しないように。いいですね。（女社長）

<念押し質問文>

- ・じゃあ分かったね？これから決して熊谷なんかと遊びはしないね？（太郎）

「けっして」は、肯定の余地を残さない完全否定であることを明示する。従って、次のような先行文脈にある肯定的な断定を否定したり、先行文脈からの当然の帰結としての肯定的断定を否定したり、先行文脈の否定を強調する場合には、「けっして」がないと不適切である。

- ・重松は巡回診断の医師からも、はっきり原爆病だと診断された。福山の藤田医師からも同様の診断を言い渡された。しかし矢須子は決して病気ではない。（黒い雨）
- ・同時に文体は非常に簡潔で明るい。どんな複雑な思想をも、のびやかに明るく、平端にかく、だから深刻好きに近代青年には好まれなことがある。あまりやさしいので物足らぬと言った人もいる。決してやさしくはないのだ。（友情）
- ・自分はおまえ達にとってよい父親ではなかった。何もかまってやれず、むしろお前たちを不幸に陥れた。だが、これがわかって貰えるだろうか？決してお前たちを愛さなかったというのではない。（楡家）
- ・おねえさま。そんな目のいろで、わたくしをごらんにならないで。貞子、決してふし

だらな娘じゃないわ。(焼跡)

- ・そんなわけではない。そんなわけは決してありません。(小僧)

「けっして」は様々なタイプのモダリティー形式と共起しうるが、肯定の余地を残さない完全否定であるために、次のような言い方はできない。(一方、後述する「必ずしも」は共起する。)

- ・*決して雨は降らないかもしれない。(必ずしも雨は降らないかもしれない)
- ・*決してバラ色のもではなさそうだ。(必ずしもバラ色のもではなさそうだ)

「けっして」は文法的否定と呼応する(740例)が、3例のみ肯定形式と共起している例があった。

- ・・・・勢いあまって母親を殴り飛ばしてしまった。それ以来、もう決して手をあげるのはやめようと思ひ、(一瞬の夏)
- ・大槻さんの顔を見ているうちに、僕は決して、美幸さんに何か言ったりするのは、よそうと思ったんだ。(太郎)
- ・あたしは決して詫りになんか行くものか。(痴人)

最初の2例は「～するのはやめよう(よそう)」のかたち限定されていて、「*決して手を上げるのはやめた」「*決して何か言ったりするのはやめなさい」とは言い難い。このような特別な例を除けば、「けっして」は、常に、文法的否定とのみ呼応する副詞である。

「べつに」は、「(これとは)別に、もっといいやり方がある」のように肯定の場合は、「他に」という語彙的意味がある。しかし、否定と呼応する場合には、この語彙的意味を失ってしまう。次の場合には、肯定の場合と同じ「他に」という語彙的意味がまだ保持されているともいえないともとれる。

- ・二人は別に行くところもなかったもので、静岡町から池の端へ出て、上野の公園へ入りました。(こころ)

が、次のような場合には、「他に」に言い換えることができない。述語のタイプに限定はないが、「けっして」ほどの強調はなく、助詞「も」と共起することが多い。また、決意、

命令、依頼文とも基本的に共起しえない。この点で、(A.2)の副詞グループと共通する側面がある。

<名詞、形容詞、動詞述語>

- ・それは、べつに深く考えての言葉でも、根拠のある忠告でもなかった。（人民）
- ・そうだな。考えてみると別におかしくもないな。（太郎）
- ・別に好きでも嫌いでもなかったけれど、一度、二度、三度と来るのが重なると、一寸重荷のような気がしないでもない。（放浪記）
- ・加藤はその会話を小耳にはさんだが、別に驚きもしなかった。（孤高）

<モダリティー形式>

- ・いや。べつにわけがあって聞いたのではない。（山椒太夫）
- ・サンフランシスコに着くのが半日や一日遅れたからといって、別に誰が困るという旅行をしているわけもない。（一瞬の夏）
- ・何しろ相手は睨み鯛の大西だから、ちょっとやそっとの答え方をしたって、別に驚いたり、へこたれたりするわけではないのである。（太郎）
- ・別にあやまることはあるまい。予定より三日ばかり遅れただけだ。（孤高）
- ・別に急ぐつもりじゃあないんですが、われわれにはまだ先がありますから。
- ・べつにいまさら母さんと暮らさなくともいいなんて言うんですよ。（錦繡）

<念押し質問文>

- ・じゃ、別に淋しくはなかったらうね。（痴人）

次のような「いい」のみとは肯定で共起するが、この「いい」は「かまわない、さしつかえない」の意味である。このような特別な場合を除けば、「べつに」は、常に文法的否定形式と共起する。

- ・それなら別にいいんだけど。（一瞬の夏）
- ・それは、べつにどうでもいいんだが、俺にはわからないことがある。（パニック）

(2) 「かならずしも、あながち」は、肯定の余地を残す<部分否定>であり、「まんざら」は、肯定に傾いた<部分否定>である。

この3つの副詞は、名詞述語、形容詞述語、動詞述語とも共起しうるが、叙述文に限られる。

「かならずしも」は、次のように、「～とは限らない」や「だけ、ばかり」のような形式と共起する点が特徴的であり、述語のタイプに限定はない。

- ・知識はその人の関心のふかさを現すけれど、人間の関心は必ずしも円満な成長をするとは限らない。(青春)
- ・男が、繰り返される砂との闘いや、日課になった手仕事に、あるささやかな充足を感じていたとしても、かならずしも自虐的とばかりは言いきれない。(砂の女)
- ・しかし、必ずしも金のつながりだけとは言えません。本気で惚れていれば、いろいろと感情のもつれもあるでしょうからね。(女社長)

<名詞述語，形容詞述語，動詞述語>

- ・しかし、それは必ずしもマルクスに依って結ばれた信頼感ではなかったのです。
(人間)
- ・海軍士官が他国に在勤して、石油資源と航空界の実情とに注目するのは、当然のことのようであるが、大正の中期にそれは必ずしも当然ではなかった。(山本)
- ・加藤は北村にかぎらず、同級生のすべてに必ずしも好感を持っていなかった。
(孤高)

<ひっくりかえし文>

- ・しかし、彼が急にそんなほうへ追いやられたのは、必ずしも、むすこの勉強あいてとして、不適任であったからではない。(路傍)

1例のみ文法的否定形式と共起していない場合があったが、その他の80例はすべて文法的否定と呼応している。

- ・それから、南郷次郎の文章は必ずしも達意の文章とは言いがたいし、何といても冷静な第3者の眼でとらえられたものではないから。(山本)

「必ずしも」の用例数が80例であったのに対し、「あながち」は10例と使用頻度をはるかに少なかった。「必ずしも」と同様に、「ばかり」「だけ」のような形式と共起することが特徴的である。次の最初の3例は、「必ずしも」に言い換えても意味はほとんど変わらないであろう。

- ・人々はあながちクリスト教徒ばかりではありません。(銀河)

- ・背筋がすかすかするのは、あながち夜が冷え込んできたばかりでもあるまい。
(太郎)
- ・すると時間を待ち兼ねたのは、あながち私たちだけではありません。（銀河）
- ・あながち壮麗という言葉を使っても言い過ぎではない榆病院からの景観に比べると
.....（榆家）
- ・ここで私のベンが渋滞したとしても、あながち無理ではない。（焼跡）
- ・しかし、さらに勘ぐって考えてみれば、白髪の老学者から握手を拒否されたという一事件も、あながち無視することはできないのであった。（榆家）

「まんざら」は、次のように二重否定形式と共起して、＜ある程度の肯定性＞を表すことが特徴的である。助詞「も」が共起することも多い。

- ・全く望み得ないように思っていた事が、満更望めない事ではないという気が僕にはして来た。（小僧）
- ・まんざら嬉しくなくもないけれど、何となくあんまり好きな人でもないような気がして来る。（放浪記）
- ・この年になるとまんざら似合わなくもないでしょ。（聖少女）
- ・が、考えてみると、先生が言うようなことも、まんざら、なかつたわけもないんだから、先生が言うとおりにしておくのが、一番世話がない、と彼は思ったのである。
(路傍)

以上の例において、「*まんざら望める事ではない」「*まんざら望めない事だ」「*まんざら嬉しくない」「*まんざら似合わない」のように言うことはできず、二重否定でなければならない。

しかし、次のような、＜マイナス評価＞の述語であれば、二重否定でなくてもよい。

- ・尤もこれは私にとってまんざら空虚な言葉でもなかつたのです。（こころ）
- ・いいえ、まんざらむだ足でもありませんでした。（点と線）
- ・君だってまんざら彼女が嫌いではあるまい。（孤高）
- ・それでも、女の子から「太郎くんはいつ帰って来ますか？」という問い合わせがあったと聞いて、まんざら悪い気がしなかつた。（太郎）

まんざら好きでないこともない。（*まんざら好きではない）
まんざら嫌いではない。

まんざらいい気がしなくもない（*まんざらいい気がしない）
まんざら悪い気がしない。

(3) 「まさか」は、次の①②のような形式との共起が典型的である。①の場合は、現実化するかどうか（真偽性）は未定である。会話文では、助詞「ね」を伴って念押し質問文になることも多い。②の場合は、既に現実化したこと（事実）に対して「そうは考えられなかった」ということを表す。

①<否定推量>

- ・まさか癌でもないだろう。それとも胸か。（青春）
- ・おれんさん、まさか不承知なんじゃごさいますまい。・・・はははは、子供を手ばなすのが、つらいんですかい。（路傍）
- ・まさか、それほどまで敵は戦争を継続しはすまい。（楡家）
- ・「ほんとですか？」と妻は目をかがやかせていった。「まさか、エープリル・フールじゃないでしょうね」（忍ぶ川）
- ・まさか夫婦喧嘩をしてとびだして来たんじゃないでしょうね。（さぶ）

②<既に現実化したことに対する予想外性>

- ・まさか、そんな泣き落しの手を使うやつた知らなかった。（焼跡）
- ・まさかあの人が心中なさるとは夢にも思いませんでしたなあ。（点と線）
- ・蔵王のダリア園から、ドッコ沼へ登る Gondola・リフトの中で、まさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした。（錦繡）
- ・伸子は、まさか純子たちが後をつけて来ているなどとは思いませんでした。

（女社長）

①の<否定推量>の場合は「～ナイダロウ、～マイ」との共起が多いが、次のような場合もある。

- ・まさか、永野さんがいまになって、ふじ子をいやだなんて言い出すわけはありませんよ。（塩狩峠）
- ・まさか柳井がつまらない干渉をした筈もないのだが。（草の花）

- ・かつての賞与式と違って、この金一封を、まさか一々院代が院長に手渡すわけにもいかなかった。(楡家)
- ・クレオパトラがどんなに利口な女だったとしたところで、まさかシーザーやアントニーより知恵があったとは考えられない。(痴人)

さらに、次のように、断定述語と共起する場合もある。これは「よもや」には言い換えられないであろう。

- ・はははは。まさか愛川にほめられて、いい気にもなりゃしないさ。大丈夫だよ。
(路傍)
- ・あたしだってまさか鬼じゃあないわ。さぶちゃんの気持ちを思うと、そう言うのは辛かったわ、自分の胸に刃物をあてるような思いで言ったのよ。(さぶ)
- ・「君の妹さんのような方を」と彼はふと云いたくなかったが、まさか口には出せなかった。(友情)

「まさか」が文法的否定形式と共起してない例は、次の2例であった。

- ・しかし、まさか走ってくるなんて、それはかなしくも決定的に予想外のことだった。
(新橋)
- ・まさか紳士と淑女に連れそって来た私が、お茶づけを腹いっぱい食いたい事にお伽噺のような空想を抱いていると、誰が思っているだろう。(放浪記)

「よもや」は文語的であり、用例数が11例と頻度が低だけでなく、共起する述語形式も、「～ないだろう(まい)」、「～わけはない」、「～とは思わなかった」の3つのタイプに限られていた。

- ・この前リーダーを一冊暗記できたのだから、それがよもや出来ないことはないでしょう。(あすなろ)
- ・余程の名工があつらえた人形か何かでない限り、赤ん坊の鼻だってよもやこんなに繊細ではありますまい。(痴人)
- ・まだろくに話もしていないような女性に道ばたでふいに片手をあげて挨拶してしまうなんて、そんな中年親父のような気恥ずかしいことをよもややるわけはない、と思いつつも、(新橋)

- ・真っ昼間、自分に想いをかけた女と、雨降りでもあるまいのに白い日傘の相合傘でもやその街を歩こうことになろうとは、夢にも思わなかっただけである。(忍ぶ川)

4 B類の副詞

(1) B類の副詞は、3つに下位分類されるが、動詞述語と共起する点で共通し、<動作・変化の非実現>に関わっている。このうち、(B.3)「ついぞ、二度と、めったに、ろくに」は、非実現の量的側面(頻度)に関わる点で、C類との共通性があるものである。

「とても、なかなか、どうにも、いっこうに」は、肯定の述語とも共起するが、この場合は形容詞述語である。従って、否定形式と共起するか否かは、動詞述語か形容詞述語かというかたちで、条件づけが異なっているのである。

- ・とても買えない。(※とても買う)
とても値段が高い。(※とても値段が高くない)
- ・彼はなかなか承知しなかった。(※なかなか承知した)
彼はなかなかてごわい。(※なかなかてごわくない)
- ・どうにも耐えられない。(※どうにも耐えられる)
どうにも苦しい。(※どうにも苦しくない)
- ・いろいろ注意したのだが、彼はいっこうにこたえない。(※いっこうにこたえる)
いろいろ注意したのだが、彼はいっこうに平気だ。(※いっこうに平気じゃない)

このうち「どうにも、いっこうに」と共起する肯定の形容詞述語(稀に状態性の動詞述語)は、次のものに限定されている。これらは、後述するように、否定的意味を潜在させているであろう。

いっこうに：平気だ、冷淡だ、事情にうとい

どうにも：具合(しまつ)が悪い、ばつがわるい、苦しい、重苦しい、痛い、寒い
妙だ、異常だ/気になる、神経をいらだたせる

一方、「とても、なかなか」は、次のように、幅広い範囲の形容詞述語(状態性の動詞述語、程度性のある名詞述語)と共起しうる。ただし、「なかなか」は、「嬉しい、悲しい、辛い、ほしい、痛い」のような、1人称主体の感情・感覚を表す形容詞述語とは共起しえない。

なかなか：いい，うまい，上手だ，おもしろい，立派だ，結構だ，有能だ，好評だ，
熱心だ，快適だ，元気だ／大変だ，きつい，頑固だ，意地っ張りだ
元気がある，愛敬がある，人気がある，活気がある，勇気がいる
しっかりしている，堂々としている／興味をそそられる，疲れる，時間が
かかる，高くつく
美人だ，苦勞人だ，豪傑だ

とても：嬉しい，辛い，ほしい，苦しい，迷惑だ，寒い／いい，すばらしい，きれい
だ，元気だ／つまらない／不器用だ，不景気だ
心配している，喜んでいる，興奮している，疲れている，喉がかわいている
似ている，瘦せている／時間がかかる，助かる／見たい
美人だ，弱虫だ

(2) 「とても，とうてい」は，能力的，状況的，規範的，心理的に＜実現が不可能＞であることを表す。従って，次のような動詞述語のタイプと共起する。

- (a)＜可能動詞＞理解（辛抱）できない／行く（言う）ことはできない／動かせない，
書けない，勝てない，信じられない，考えられない，手におえない
- (b)歯がたたない，手が届かない，かなわない，及ばない，想像もつかない，足りない，
間に合わない，見えない／ない，いない
- (c)来そうにない，生まれそうにない／勝てる（勝つ）見込み（望み）はない／見るどこ
ろではない／貸す余裕（余地）がない／受かりっこない
- (d)言うわけにはいかない／承認される道理がない
- (e)断る勇気がない／行く自信がない／行く気力がない／行く気がしない

否定述語と呼応する場合には，「とても」と「とうてい」の置き換えが可能である。頻度的には，「とても」の方が多く用いられており，「とうてい」はやや文章語的になっている。

「とても，とうてい」は，「無理だ」「駄目だ」「～しがたい」「～しかねる」「難しい」の否定的意味をもった形式とは共起する。

- ・とても，これ以上従っていくことは無理だから，・・・（孤高）
- ・然し流れがきつくて橋を力に上がろうと思っても，到底駄目だった。（楡家）
- ・とても許しがたい暴虐であった。（焼跡）

- ・奥さんの病院が丸焼になったとしたら、とても私は壁掛を頂きかねますからね。

(楡家)

ただし、次の場合は、「とても」に言い換えると、<程度>の意味になってしまうであろう。

- ・でも医者はその時到底難しいって宣告したじゃありませんか。(こころ)

「とうてい」は典型的肯定述語とは共起しないが、「とても」は共起する。従って、次のような場合、「とても」は、「かわいそうだ、だるい」と呼応しているとも「できない、眠れない」と呼応しているともとれる。が、「とうてい」であれば、後者に限定されることになる。

- ・とてもかわいそうでそんなことはできない。(銀河)
- ・ちょっと、宮村さん、私の足揉んでくれない。とてもだるくて眠れそうもないわ。

(孤高)

なお、「とうてい」には、1例のみ、名詞述語と共起している例があったが、これは典型的名詞述語ではなく「かなわない、たちうちできない」の意味で使用されている。

- ・到底自分は彼の敵ではあるまいと思った。(草の花)

(3) 「どうにも、なかなか、いっこうに」は、<アクチュアルな状況における実現の困難さ>を表す。従って、「とても、とうてい」とは、次のように、<実現のアクチュアル性の有無>で異なっている。

- ・「とても、とうてい」は(恒常的)能力上、規範上不可能であることを表すが、「どうにも、なかなか」は、アクチュアルに(現実)に努力しているにも関わらず、実現が困難であることを表す。

私にはこの問題はとても(とうてい)解けない。

この問題がどうにも(なかなか、いっこうに)解けない。

とても私が行くわけにはいかない。

*どうしても (なかなか, いっこうに) 行くわけにはいかない。

- ・「どうしても, なかなか, いっこうに」は<アクチュアルな現在>を表せるが, 「とても, どうてい」はそうではない。

怪我がどうしても (なかなか, いっこうに) 治らない。

この怪我はとても (どうてい) 治らない。

- ・<過去>の場合には, 「とても, どうてい」は<非実現>を表すが, 「なかなか」は次のように, <実現>をも表しうる。ただし, 「どうしても」は<非実現>を表す点で, 「とても, どうてい」と共通する。

そんなお金, とても作れなかったわ。(どうしても, 作れなかった。)

お金の返却遅くなりました。なかなか作れなかったものですから。

「どうしても」は, 「どうにもならない」「どうにもできない」というかたちで熟語的に使用される場合が多い。

- ・約束してしまったので, いまさらどうにもならないのだ。(一瞬の夏)
- ・痛くて, どうにもならん。(太郎)
- ・しかし, 阿片法となると内務省の直轄だ。そこからの指示となると, 当方としてはどうにもできない。(人民)

<実現は不可能> (過去の場合は<非実現>) という意味を表すので, 「とても, どうてい」に近いが, <実現させる方法がない>ことを表す点で異なる。(p.85のリストと比較されたい。)

「とても, どうてい」と共通する述語形式

- (a)理解 (我慢) できない / 変えることができない / 書けない, 思い出せない, 身動きがとれない, 耐えられない, 手におえない
- (b)歯がたたない, 決心がつかない
- (c)眠れそうにない, 話があいそうにない

共通しない述語形式

(f)答えようがない, 身体を支えようがない, 弁解のしようがない, しようがない

- ・何を聞かれても, あなたと瀬尾由加子さんのことは, どうにも答えようがありませんでした。(錦繡)
- ・どうにもしようがないだろう。まあ, そのうち出てくるさ。(冬の旅)

また, 次のように, アクチュアルな動作をやっているにも関わらず実現しないことを表す。

- ・今日は朝早く起き, お袋にことづける手紙を書きかけたが, 万感こもごも来てどうにも書けなかった。(黒い雨)
- ・さすが豪気の將軍も, すっかりあわてて赤くなり, 口をびくびく横に曲げ, 一生懸命, はね下りようとするのだが, どうにもからだがうごかなかった。(銀河)

「どうにも」は, 次のように否定的意味をもった肯定形式と共起する場合もある。

- ・当然平凡に納まってよいその音調を変二長調へだしぬけに急転させていて, その部分がどうにも歌いにくかった。(楡家)
- ・どうにも救い難い会社に見えたことが, 見違えるように張り切り始めた。
(女社長)

次のような場合も, 「痛くてしようがない, 妙に思えてしかたがない」のような否定的意味を潜在させていると考えられる。「どうにも」と共起しうる肯定形式は, 「苦しい, 具合が悪い, 寒い, 異常だ/気になる」のような<マイナス評価>のものであって, 「*どうにも快適だ」「*どうにも具合がいい」とは言えない。

- ・肺の骨がどうにも痛い。(放浪記)
- ・もう1度マリアの箇所を読み返してみた。やはりどうにも妙である。(塩狩峠)

次に, 「なかなか」は, <実現の困難さ>を表すので, 次のように<実現>してもよい。この点で, 「とても, とうてい」や「どうにも」とは異なっている。

- ・しかし、エディも利朗もすでに来ているというのに、肝心の内藤がなかなかやっ
て来ない。一時半頃、ようやく姿を現したが、やけにぐったりしている。

(一瞬の夏)

- ・なかなか思いつかなかったが、無理に考えたあげく、やっと被害を受ける者のある
ことに気がついた。(人民)
- ・似たようなものはあってもなかなか本物にはぶつからなかった。それが或る日とう
とう見つかった。(檸檬)

次の場合は<非実現>である。従って「どうにも」と置き換えることができる。

- ・来る時の電車のなかで、会ったらいろいろ話そう、と思っていたが、なかなかうま
く話が出てこなかった。またの機会に話そう。(冬の旅)

「なかなか」は次のような文法的否定形式と呼応するのが基本である。(p.85, p.87のリス
トと比較されたい。)

- (a)就職できない／書くことができない／作れない、休めない、会えない、言えない
眠れない
- (b)来ない、現われない、帰らない、分からない、気づかない、治らない、消えない
開かない、進まない、終わらない、始まらない、承知しない、受け取らない／いな
い、ない
- (g)承知しようとしなない、受け取ろうとしなない、食べようとしなない

「～がたい、～にくい」とも共起しうるが、否定と呼応しているとも、肯定と呼応して
<程度>を表しているともとれる。

- ・でも、その妻の伝えようとしていることはなかなか理解し難く、たとえどうにか理
解できても私を大きくとまどわせるようなものでした。(エディ)
- ・1本1本数えるのは手軽だが、数え終わった毛と、まだ数えていない毛との区別が
なかなかつけにくい。そこで、数えたというしるしにリボンをつけることにした。
(ブン)
- ・一体15, 6の少女の気持ちというものは、肉親の親か姉妹ででもなければ、なか
なか分かりにくいものです。(痴人)

次のような場合、「なかなか」の位置によって、否定と呼応するか否かが違って来るかもしれない。

言うのは簡単だ。しかし、なかなか実行は難しい。(否定との呼応)

言うのは簡単だ。しかし、実行はなかなか難しい。(肯定との呼応)

「この本はなかなか難しい」「この仕事はなかなか大変だ(きつい)」のようになると、<程度>の意味であろう。この場合は<マイナス評価>の形容詞述語であるが、「なかなか」は「いい、けっこうだ、うまい、おもしろい、立派だ」のようなく<プラス評価>の形容詞述語とも共起する。

「いっこうに」は、B類に分類したが、C類との共通性も見られる副詞である。

「どうにも」が<アクチュアルな実現の不可能性>を、「なかなか」が<実現の困難さ>を表すとすれば、「いっこうに」は<実現の兆し(痕跡)のなさ>を表す点が特徴的である。次のような述語形式と共起するが、「どうにも、なかなか」と違って、可能動詞との共起は少なくなり、(h)「～心配がない」「～様子がない」との共起が特徴的である。また、(i)「連絡がない、効き目がない、音さたがない」のような形式と共起する点では、「どうにも、なかなか」と異なり、C類の「さっぱり」に近い。(j)「いっこうにおもしろくない」「いっこうに知らない」のような場合には、程度に関わってもくる。

(a)発見できない／出られない

(b)現われない、やって来ない、進まない、分からない、気づかない、酔わない、動じない、気にしない、敬意を感じない

(c)降りそうにない、お金になりそうにない

(h)疲れた心配を見せない／衰える(出てくる)心配がない／成果があがった(ついてくる、意に介する)様子がない

(i)手応えがない、連絡がない、返事がない、音さたがない、反響がない、効き目がない

(j)うれしくない、おもしろくない、痛くも痒くもない／知らない／さしつかえない、かまわない

次のような場合には、「なかなか」に言い換えることができる。

・幾台も待った末に辛うじて乗り込むと、今度は徐行したり停まったりして一向に進ま

ない。(楡家)

- ・冷蔵庫のビールを飲みつつ待ったが、いっこうにヒギンズはあらわれず、横になってついうとうとし、はっと気づいてとび起きると、二人が部屋に入って来たところで、みゆきはヒギンズに寄り添い、先程のとげとげしさはまるでない。(アメリカ)

しかし「いっこうに」は<実現の兆し(痕跡)がまったくないこと>を表すので、次のような述語形式と共起する。

- ・人間は毎日イタチや猫やタカにまじって攻撃をくりかえしたが、町でも野でもネズミの勢力はいっこうに衰える気配を見せなかった。(パニック)
- ・降ったり、とけたりしていた雪が、この2、3日はいっこうにとける気配がない。
(塩狩峠)
- ・かまわず先にたつて、土間の方に歩きかけたが、女はいっこうについてくる様子もない。(砂の女)
- ・そんな嘯み合わないやりとりにも、一向に気を悪くした様子はなく、白い歯をみせてさわやかに笑うのだ。(砂の女)

次のように、形容詞述語と共起している場合でも、<アクチュアルな状態が実現しない>ことを明示する点で、C類の「ぜんぜん」とは異なっている。

- ・なんといわれても、いっこうに痛くも痒くもないね。(ブン)
- ・自分は起訴猶予になりました。けれどもいっこうにうれしくなく、世にもみじめな気持で、検事局の控室のベンチに腰かけ、引取人のヒラメが来るのを待っていました。
(人間)

次のような場合になると<実現(アクチュアル化)>の意味がないので、「さっぱり」や「ぜんぜん」に言い換えることができる。

- ・恭次郎さんはいい男だな。あの人は嘘を言わない。だけど、私は恭次郎さんの詩はいっこうに判らない。(放浪記)
- ・太郎は「ゲンコク」といわれる現代国語や現代文学は一向に知らないが、古典はひとりよく読むのである。(太郎)
- ・当然、衛兵が、守衛か用心棒であっても、一向に差し支えないわけだ。(砂の女)

- ・人に迷惑をかけさえしなきゃ、家中が埃だらけだって、一向に構わないと思う。(太郎)

「いっこうに」が肯定形式と共起している例が4例あった。が、すべて、「気にならない、動じない」「気にしない」「知らない」という潜在的な否定的意味がある。

- ・普通の人には、自動車に乗って、70キロから80キロまでのスピードでは、平気な顔をしているが、時速100キロを越すと恐怖心を起こす。船では24ノット以上は気味が悪い。・・・山本はそれが、一向に平気であった。(山本)
- ・なるほど・・・しかし、こちらは、一向に平気だね・・・そっちが、そのつもりなら、こっちも持久戦だ。(女社長)
- ・他の蜂は一向に冷淡だった。(小僧)
- ・いや、私は一向に独逸の事情にうとい者でございまして。(楡家)

(3) 「ついぞ」「二度と」は<非実現>そのものを問題とする。

「ついぞ」は、<発話時(一定時)までに1度も実現していないこと>を表す。文語的であって、日常会話では普通使用されない。

- ・伝吉と陽子がいっしょに外を歩いているところはずいぞ見かけたことがなかった。
(焼跡)
- ・もっとも当人の足はのべつに泥の中に尻切草履を引きづっていてついぞ汚れを拭いたためしがない。(焼跡)
- ・ついぞ見かけない女が現われたからびっくりしたんでしょう。あの女は緊張したときはあんな眼つきをするんです。(孤高)

次に、「二度と」は、叙述文のみならず、決意文、命令文とも共起することができる点では、「けっして」と共通している。

<叙述文>

- ・私は二度と「大滝」へ行かなかった。(金閣寺)

<決意文>

- ・もう、おれは、二度とここへは来ないよ。(人間)
- ・あたしは今、こうやって、楡の家の門を通っている。二度とくぐるまいと思っていた門を、とにかくは行って出たわけだ。(楡家)

- ・そのかわり、もう二度とお前の前に姿を出さないようにしよう。(錦織)

<禁止文>

- ・それは二度と口にするな。(さぶ)
- ・フンさん、二度とばかばかしい話を持ちこまないで下さい。(ブン)
- ・二度と来るんじゃないよ！今度来たら、塩かけて溶かしちゃうからね！（女社長）

次の「二度と」は、意味上は「言う」「戻る」ことを否定するが、形式上は主文の方が(だけが)否定形式となっている。

- ・二度としゃばへ戻ろうとは思わない。(さぶ)
=二度としゃばへ戻るまいと思う
- ・びっこなんて二度と言ったら承知しないぞ。(塩狩峠)
=びっこなんて二度と言うな。

次の場合になると、文法的形式上は肯定だが、意味上は否定であるがゆえに、「二度と」が使用しうる。実例としては、この4例のみであった。

- ・こんなものは二度と見るのはやめよう、と思いました。(ビルマ)
- ・もう二度とごめんだわ。(女社長)
- ・島村は二度とそっちを向いては悪いような気がしていたのだった。(雪国)
- ・第1, 逃がしてやった鶉が、二度と人間の手に捕まるかどうか、可能性は、ごく薄い。(砂の女)

「めったに」は<頻度>を表す場合が多いが、存在動詞「イナイ、ナイ」と共起して<存在量>を表す場合もある。が、形容詞述語とは共起しない。

<頻度>

- ・太郎はコーヒーをめったに飲まない。(太郎)
- ・山本はしかし、宵のうちに官舎に戻っている事はめったになかった。(山本)
- ・ええ、こんなことはめったにありはしないのよ。(痴人)

<存在量>

- ・そんな古風な服装をした老紳士など滅多にいないのだから、同一人物である可能性は大いにあると、七瀬は思った。(エディ)

「ろくに(ろくろく, ろくすっぽ)」も、形容詞述語とは共起しない点で、C類の副詞とは異なるが、<量><頻度>に関わる点では、C類と共通する。「ろくすっぽ知らない」のような場合は、<程度>にも関わるであろう。

<量的不十分さ>

- ・私になにを聞いてもろくに返事もしません。(女社長)
- ・朝、食べただけで、その後食べ物らしいものは、ろくろく口に入れていなかった。
(孤高)
- ・基一郎は別人のように荒々しく湯をはねとばしながら風呂からあがる。ろくすっぽ体をふきもしない。(楡家)
- ・ここには牧草もろくに生えていないのだ。(パニック)
- ・なにしろ、このボロ会社には、グラビアの費用もロクにありやしないんだ。
(砂の上)
- ・それでよく出張できる身分になったものだな。ろくすっぽ記事の書き方も知らなかったのに。(あすなろ)

<頻度的不十分さ>

- ・その後、ろくろく会っていないけどね。(太郎)
- ・おなじ建物にしながら二人はろくに顔もあわせる機会がなかったのである。
(パニック)
- ・太郎兵衛の女房は、手厚くみついでくれ親切に慰めてくれる母に対しても、ろくろく感謝の意をも表すことがない。(山椒)

特殊な例外を除けば、「めったに」と「ろくに(ろくろく, ろくすっぽう)」は、常に文法的否定と呼応する副詞である。

5 C類の副詞

(1) C類の副詞は3つのタイプに下位分類されるが、意味的には、(C.1)(C.2)と(C.3)とに分かれ、前者は<全面否定>であり後者は<部分否定>である。共起する述語のタイプから言うと、次のようになる。(C.1)は形容詞述語と共起しにくい点で、B類の副詞と共通する側面がある。

(C.1)動詞述語との共起が基本である

「さっぱり、まるで」は形容詞述語と共起した例がほとんどない

「ぜんぜん」は、5例

「夢にも、露ほども、もうとう」は形容詞述語と共起した例がないが、動詞述語は心理活動（状態性述語）に限定される

(C.2)形容詞述語とも動詞述語とも共起する

(C.3)形容詞述語とも動詞述語とも共起する

ただし、「さっぱり、まるで、ぜんぜん」は、次のような状態性述語との共起はある。

さっぱり：音さたがない、する気がない、実感がない、元気がない

まるで：音さたがない、する気がない、実感がない、罪悪感がない、気負いがない、元気がない、愛情がない、興味がない、教養がない、自信がない、縁がない

ぜんぜん：する気持ちがない、可能性がない、予定がない、関係がない、興味がない
食欲がない、恐怖がない、スピードがない

また以上の副詞のうち、常に、文法的否定形式と共起しているのは、次のものである。

(C.1)夢にも、露ほども、もうとう

(C.2)すこしも、ちっとも、これっぽっちも、いささかも、みじんも

(C.3)たいして、さして、さほど

他の副詞、(C.1)「さっぱり、まるで、ぜんぜん」、(C.2)「それほど」、(C.3)「あまり」は、肯定とも共起するが、否定と共起する場合とは、以下に述べるように、条件が異なる。

(2)「さっぱり」は、「分からない（見当がつかない）」と共起する場合が最も多い（102例中、56例）が、次のように、＜程度＞＜量＞＜頻度＞の全面否定の場合もある。

ただし、程度否定とは言っても形容詞述語と共起した例は、次の1例「面白くない」だけであり、その他は、「音さたがない、やる気がない、実感がない、元気がない」のような述語形式であった。「彼はちっとも悪くない」「少しも嬉しくない」とは言えても、「彼はさっぱり悪くない」「さっぱり嬉しくない」とは言えない点で、形容詞述語と基本的に共起する(C.2)の副詞グループとは異なり、(B.2)の副詞グループと共通する側面がある。

<程度>

- ・母さんには、あなたのことがさっぱりわからないのですよ。(冬の旅)
- ・吉川が何を考えているのか、さっぱり見当がつかなかつた。(塩狩峠)
- ・海軍がそれに援助を与うべき理由がさっぱり納得ゆかん。(山本)
- ・暖簾に腕押しのように、さっぱり矢須子さんは元気がない。(黒い雨)
- ・綴り方などは、自分にとって、ただお道化の御挨拶みたいなもので、小学校、中学校、と続いて先生たちを狂喜させてきましたが、しかし、自分では、さっぱり面白くなく、絵だけは(漫画などは別ですけれども)その対象の表現に、幼い我ながら多少の苦心を払っていました。(人間失格)

<量>

- ・しばらく使っていなかったとみえて、さっぱりインクが出ない。(女社長)
- ・貴様、さっぱり豆を食わんな。まさか、俺に気兼ねしてるんじゃないだろうな。

<頻度>

- ・河合さん、近頃さっぱりダンスにお見えになりませんね。(痴人の愛)

次のような場合の「さっぱり」は「いっこうに」に言い換えても意味が変わらず、「さっぱり」とB類の副詞「いっこうに」との連続性を示している。

- ・ここで、4時に、と昌也は言ったのだが、もう5時近くなるというのに、さっぱり姿を見せないのである。(痴人)
- ・そうあきらめて、おれんはすごすごうちへ戻った。しかし、裁ち板の前にすわっても、仕事がさっぱり手につかなかつた。(路傍)

「さっぱり」が肯定述語と共起した例は、「やめる、忘れる、別れる」のみであった。(様態副詞としての用法は除く)

- ・私はもうこんな愚劣な大学なんか、さっぱりやめます。(太郎)
- ・思いがけず紛糾した事の始末をつけてさっぱりわれてしまうために、・・・(華岡)
- ・もうあの男ともさっぱりわれてきたんですからね。(放浪記)

以上の例の「さっぱり」は、否定形式と共起している場合と違って、「きれいさっぱり」に言い換えることができ、実例でも「きれいさっぱり」が使用されている場合の方が多かった。

- ・女ってのは、自分がかつて言ったことを、都合の悪い時には、きれいさっぱり忘れられるもんだからな。(太郎)
- ・僕は、僕は、……もうあの女をキレイさっぱりあきらめたんです！(痴人)
- ・大学でも揃わないと思われる精神神経学雑誌は綺麗さっぱり焼けてしまっていた。
(楡家)
- ・それで煩悶も疑惑も綺麗さっぱり帳消しになるのだ。(小さき)

次に、「まるで」は、肯定形式と共起する場合、次の2つの場合がある。比喻の場合は名詞述語であってもよい。

(1) 比喻

まるで人形のようなだ／人形そっくりだ／人形みたいだ
これじゃ、まるでお通夜だ(家出だ)

(2) 語彙的に否定的意味をもった形式

- ・まるで違う(異なる, 間違っている, 見当違いだ, 嘘だ)
- ・まるで逆だ(反対だ, 対蹠的だ)
- ・まるで無意味だ(無駄だ, 能無しだ)
- ・まるで別人だ(別物だ, 他人だ)
- ・まるで欠けている(空虚だ, がら明きだ)
- ・まるでちんぷんかんぷんだ(うぶだ)
- ・まるで忘れてしまう(なくす, よす, 失せる)
- ・まるで変わってしまう
- ・まるでめっちゃめっちゃだ(ばらばらになっている)
- ・まるでへただ

文法的否定形式と共起する場合には、「さっぱり」「ぜんぜん」に言い換えることができ、3者の共通性が高い。

<程度>

- ・しかしだからといってそのあと、どうしていいのかまるでわからなかった。(新橋)
- ・どちらの方に歩いていっていいのか、まるで見当がつかなかった。(路傍)
- ・文選って何をすることか、彼はまるで知らなかった。(路傍)

- ・毒薬もイタチもワナもまるで効果がなかった。(パニック)
- ・彼はさもなくだらないというように顔をしかめ、まるで興味がないと言った。

(一瞬の夏)

<量>

- ・どの位って、山と田が少しあるぎり、金なんかまるでないでしょう。(こころ)
- ・尿毒症という言葉も意味も私には分らなかった。この前に冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞かなかった。(こころ)

<頻度>

- ・ちかごろはおそれをなしてまるで寄りつかねえ。(焼跡)

調査対象とした46冊の資料には、形容詞述語の否定と共起した例はなかった。しかし、最近のものでは、次のような用例が見受けられる。

- ・私の見聞する範囲では人妻の姦通も、人の夫に手を出す独身女の不倫もまるで珍しくない。(男の勤ちがい、女の夢ちがい)

次に、「ぜんぜん」は、「さっぱり、まるで」と比べて、形容詞述語と共起する場合が多くなる点で、(C.2)に近い副詞である。実際の用例としては、次のような形容詞述語と共起した場合があった。

さっぱり：おもしろくない (1例のみ)

まるで：0例

ぜんぜん：好きじゃない、よくない、おもしろくない、いやらしくない、子供らしくない (5例)

しかし、動詞述語との共起の方が多い。

<程度>

- ・分らない、全然分らない。(草の花)
- ・僕全然、英語できないんだ。(太郎)

<量>

- ・昨夜はぜんぜん眠っていない。(孤高)
- ・アルコール分は全然なかった。(楡家)

<頻度>

- ・酒はぜんぜんやらない。(孤高)
- ・未紀って全然映画見ないのね。(聖少女)

「まるで」と同様に、次のような語彙的に否定的意味をもった肯定形式とは共起しうる。

- ・無学だ (没交渉だ, 未知の人だ)
- ・駄目だ
- ・違う (異なる, 誤謬だ)
- ・別だ (別人だ, 赤の他人だ)
- ・からっぽだ
- ・素人だ (=知らない)
- ・いい (=かまわない)
- ・平気だ (=気にしない)

さらに、次のように否定的意味のない肯定形式と共起した例が2例あった。ただし、最初の例は<マイナス評価>という否定的意味が潜在していると考えられるべきかもしれない。

- ・そんなの無意味だわ。ほんとに死ぬなんて全然あほらしい。(焼跡)
- ・其の通りだ。僕も全然同意だ。(山本)

対象とした資料のなかにはなかったが、最近のものでは、次のような使い方の例が見受けられる。

- ・そうそう。その方が全然いい。(恋愛レッスン)

「ゆめにも」は共起する述語が「思わない, 考えない, 知らない」に限定されている。

- ・まさかこんなことになろうとは夢にも考えませんでした。(点と線)
- ・お前, うちがお金持ちだなんて夢にも思っちゃいけませんよ。(楡家)
- ・吾一は貯金帳がからになっていることは, 夢にも知らなかった。(路傍)

「もうとう, つゆほども」も、次のように述語が心理活動関係に限定されている。

- ・勿論私はこの親しい友を笑い者にしようなどとは毛頭思わない。(小僧)
- ・彼をいたわる気持など、毛頭もちあわせていないらしい。(砂の女)
- ・毛頭そんな考はなかつた。(小僧)
- ・編隊に立ち向かう気は毛頭ない。(アメリカ)
- ・大学山岳部と競争するつもりは毛頭なかつたのだが。(砂の女)
- ・なんの気がねも遠慮も毛頭なく。(楡家)

- ・自分は死をこわいとは露ほども思わない。(楡家)
- ・ここで不世出の名ガイド嘉門次に比較されたことも彼は露ほども知らなかつた。
(孤高)
- ・書物に対する尊敬の念は露ほどもなく。(楡家)

ただし、「つゆほどに」は次のように、心理活動ではない述語と共起した場合が1例のみ見られた。

- ・しかし、診断がついてもなんにもなりません。治療法が露ほどもないのですから。
(楡家)

(2) 「すこしも、ちつとも、これっぽっちも、いささかも、みじんも」は、形容詞述語と共起して<程度>を全面否定する場合と、動詞述語と共起して<量><頻度>の側面を全面否定する場合がある。動詞述語であっても「似ていない、感動しない」のような状態性のものと共起した場合には、程度否定となる。

「すこしも、ちつとも」が使用頻度大である。「いささかも、みじんも」は文語的であり、「これっぽっちも」は俗語的であって、使用頻度小となっている。

<程度>

- ・夜風はあつたが、少しも寒くなかつた。(あすなろ)
- ・少しも、絶望的じゃないね。(太郎)
- ・あたし、ちつともうれしくないんです。(忍ぶ川)
- ・うちは、ちつともいい家じゃない。(太郎)
- ・しかし、あの宇野修一郎とはすこしも顔が似ていなかつた。(冬の旅)
- ・僕は今やっている戦争なんか、これっぽっちも感動しない。(草の花)
- ・いささかも後悔いたしてはおりません。(エディ)

<量>

- ・教えてやるが家には金なんぞ少しもない。(楡家)
- ・老師はこのように説明すると、日本の敗戦には少しも触れずに講話を打ち切った。
(金閣寺)
- ・お前はちっとも食べないから。(忍ぶ川)
- ・そうなったら、精神の自由なんてものはこれっぽっちも残りはしない。(草の花)
- ・どの顔も満面に笑みを湛えて、・・・逡巡などの翳さえ微塵もみえません。
(忍ぶ川)

<頻度>

- ・婆やは少しも聡を抱いてくれないじゃないの。聡なんか・・・ちっとも可愛いと思っ
てくれないじゃないの！(楡家)
- ・野島さまはこの頃ちっともお見えになりません。(友情)

(3) 「たいして、さして、さほど」は、形容詞述語と共起して<程度の部分否定>を表すが、<量>に関わる場合もある。動詞述語であっても「驚く、喜ぶ」「違う」のようなく状態性>のものと共起した場合には<程度否定>となる。「あまり」とは違って、この3つの副詞には<頻度>を表す用例はなかった。

<程度>

- ・全く悲しくないって言ったら嘘だけど、たいして悲しくないね。(太郎)
- ・雨は小止みなく降っていたが、さして強い雨脚ではない。(草の花)
- ・二日目のスパークリングもさほど悪くはなかった。(一瞬の夏)
- ・私はさほどギャンブル好きではなかったから、普通ならラスベガスなど簡単に素通りしてしまっただろう。(一瞬の夏)
- ・どういうわけか藤本のそんな話を聞いてもたいして驚かなかったが、それよりもどうして藤本がそんなことを言い出したのだろうか、ということの方が気になった。
(新橋)
- ・どっちだってたいして違わないじゃないの。(女社長)

<量>

- ・もともと野々宮には継続してやる仕事というのはたいしてなかったので、(新橋)
- ・こちらの被害もさしてないらしく、・・・(楡家)
- ・敵の上陸が明朝として、あの大部隊のまえに自分らが壊滅されるのにさほど時間はかかるまい。(楡家)

次のような場合、呼応しているのは、形容詞述語である。従って、位置の変更は不可能である。

- ・母に映画や芝居を見せてもらったが、さほど面白いとは思わなかった。
*面白いとはさほど思わなかった。(あすなろ)
- ・夕食前だからさして遠くまで行った筈もない。(草の花)
*夕食前だから遠くまでさして行った筈もない。

「それほど」は、肯定形式とも共起するが、その場合は、文脈指示用法である。否定と共起する場合も、肯定形式の場合と同様に文脈指示用法の場合もあるが、さらに、「たいして、さほど」と同じ<程度、量>に関わる部分否定の用法が派生している。

次の場合、<文脈指示用法>の場合の「それほど」は「さほど」に言い換えられないが、<程度、量>の否定の場合は「さほど」に言い換えても意味は変わらない。

<文脈指示用法>

- ・私はこの塀と門を目前にして、犯罪人とはなにか、について考えました。それほどこの塀と門は印象的でした。(冬の旅)
- ・「あーあ」と誰かが溜息をした。私はこれほど単純な絶望の声を聞いたことがない。それはかなり太くて低い、しかし響のない乾いた声で、長く尾を引いた。7人の仲間の誰が放った声か、推測することは出来なかった。それほどそれは人間の声と似ていなかったのである。(野火)

<程度・量>

- ・月はまだ半月だったが、浜へ降りると、夜風はそれほど寒くなかった。(太郎)
- ・エジソンの偉大なことはいうまでもないが、この文句にはそれほど感心しないな。当り前のことのような気がする。(人民)
- ・成果はそれほど上がらなかった。(孤高)

次に、「あまり」も<部分否定>を表すが、「たいして、さして、さほど、それほど」とは、次の2点で異なる。

第1に、<程度、量>の他に<頻度>を表す。

<程度>

- ・正直言って、僕もヤソはあまり好きじゃありません。(塩狩)
- ・きみたち姉妹は、あまり似ていないね。(砂の女)
- ・母はくるみをあまり愛していませんでした。(聖少女)

<量>

- ・車は1台も走ってはず、人影もあまりない。(エディ)
- ・金はあまり払えないのだがと恐る恐る告げると、(一瞬の夏)

<頻度>

- ・照れかくしに頭を掻く癖も、このごろはあまりやったことはなかった。(孤高)
- ・このところ手紙があまりこないが、忙しいせいなのだろうか。(人民)
- ・編集長は森川トオルとって、これもまたあまり会社に来ない人だった。(新橋)

第2に、次のような禁止文あるいはそれに準ずるモダリティー形式と共起しうる。この「あまり」は「たいして、さして、さほど、それほど」に言い換えることはできない。

- ・あまり、僕のことを、心配なさないで下さい。(冬の旅)
- ・あの男をあまりからかわないでちょうだいね。(聖少女)
- ・あまりおそくならないでね。(アメリカ)
- ・とにかくあまり私を信用しては不可ませんよ。今に後悔するから。(こころ)
- ・酒はいくら飲んでもいいが、物はあまり食ったらいかん。(太郎)
- ・あまりいい気にならねえ方がいいな。(エディ)
- ・まあ、そうだが、もとはあまり正さんでいい。(太郎)

また、「あまり」は「たいして、さして、さほど」と異なり、肯定形式とも共起する。その場合は、次のように、従属文の位置にあるか、「～すぎる」と共起する。

<従属文>

- ・大戸が来るのがあまり遅いので森田が心配しはじめた。(一瞬の夏)
- ・われわれがあまり柵のむこうをのび上がっては見るものだから、何かあるのだろうとそちらの方を見ました。(ビルマ)
- ・おっと、あまり飲むと、また痔が出る。(楡家)
- ・お時さんはこの次にしよう。あまり大勢で空けたら悪いよ。(点と線)
- ・あまりひどい喧嘩わかれとなつては日本全体に気の毒だと思えばこそ……。 (山本)

- ・無断欠勤があまり続く場合は死亡したものとみなすと規則に書いてあります。
(女社長)

- ・あまりくどい聞き方をして, 女に疑いをいだかせるのもまずかった。(砂の女)
- ・あまりいつまでも伯父さんにご迷惑をかけるのが, 辛いんです。(青春)

<主文> (「～すぎる」形式と共起)

- ・加藤は黙っていた。あまり話がうますぎた。(孤高)
- ・彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。(こころ)

主文で使用されているにも関わらず「～すぎる」と共起していない例は、次の2例のみであった。

- ・それはあまり残酷だ。(友情)
- ・野鳥はあまり気の毒です。(友情)

以上のような場合は、「あんまり」のかたちの方が普通であろう。<マイナス評価>の述語と共起する。

- ・貴公はあんな電報を打つなんて、あんまり神経質だな。(山本)
- ・お母さんの様にああ言って叱っては、あんまり可哀相ですわ。(野菊)
- ・あんまり贅沢よ、ご飯だって気にいらなきや途中でやめちゃうし、水はいやだってジュースしか飲まないし。(アメリカ)
- ・だって一人で死ぬのはあんまり寂しいもの。(草の花)
- ・あんまり急な話だ。(痴人)

注

- 1) 本稿は、1997年度横浜国立大学大学院日本語学特別演習において受講生とともに行った研究成果に基づいている。この研究成果は『否定対極表現の基礎的調査研究』として一応まとめたが、時間が限られていた関係で、分析が必ずしも正確なものとは言えなかった。本稿はそれを全面的に修正したものである。

ただし、明治期から現代にわたる文学作品を対象としているため、歴史的変化の問題など今後の課題を残している。

また、「金輪際」「皆目」「これとって」のように、用例数が10例以下と極めて少ないものは、すべて文法的否定形式とは共起していても、述語のタイプを特定しにくいので除いた。

さらに、次のような形式もすべて文法的否定形式と共起していたが、本稿では除いている。

- ・一度も（一度だって）、一人も、一言も、一歩も、一口も、一滴も、一本も
- ・何ひとつ、誰一人
- ・指一本、雲ひとつ、
- ・～分と、～メートルと
- ・なんら、なにも、だれも、なにものも、どこへも

また「まったく」は否定形式とも肯定形式とも共起するが、その条件づけにはやや複雑な問題があるので、本稿では除いている。今後の課題とする。

- 2) 「まる（っ）きり」「一概に」「てんから」「どだい」のような副詞は、否定形式とも肯定形式とも共起する用例があり、否定形式と共起した例の方が多かったが、用例数が非常に少ないので、本稿では除いている。

- ・まるきり思い出せないんだ。（風立）
まるっきり尋問だったわ。（楡家）
- ・はだか踊りを一概に軽蔑してはいけないぞ。（孤高）
こういう考え方を世間の純情な人間は一概に軽蔑する。（青春）
- ・だけど、詩もてんから売れやしない。（放浪記）
てんからばかにしているふうにも見えた。（孤高）
- ・どうにもこうにもどだいたりまへんのや。（華岡）
胸膜炎てのはどだい肺病のことでしょう？（楡家）

資料一覧（左の（ ）内は本文中で用いた略号）

- （あすなろ）『あすなろ物語』井上靖
- （錦繡）『錦繡』宮本輝
- （エディ）『エディプスの恋人』筒井康隆
- （こころ）『こころ』夏目漱石
- （さぶ）『さぶ』山本周五郎
- （パニック）『パニック』開高健
- （ビルマ）『ビルマの豎琴』竹山道雄
- （孤高）『孤高の人』新田次郎
- （ブン）『ブンとフン』井上ひさし
- （一瞬）『一瞬の夏』沢木耕太郎
- （華岡）『華岡清洲の妻』有吉佐和子
- （雁）『雁の寺・越前竹人形』水上勉
- （金閣寺）『金閣寺』三島由紀夫

- (銀河) 『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治
(黒い雨) 『黒い雨』 井伏鱒二
(砂の女) 『砂の女』 阿部公房
(アメリカ) 『アメリカひじき・火垂るの墓』 野坂昭如
(砂の上) 『砂の上の植物群』 吉行淳之介
(山本) 『山本五十六』 阿川弘之
(山椒) 『山椒太夫・高瀬舟』 森鷗外
(死者) 『死者の奢り・飼育』 大江健三郎
(女社長) 『女社長に乾杯』 赤川次郎
(小さき) 『小さき者へ・生れ出づる悩み』 有島武郎
(小僧) 『小僧の神様・城の崎にて』 志賀直哉
(焼跡) 『焼跡のイエス・処女懐胎』 石川淳
(新橋) 『新橋烏森口青春編』 椎名誠
(人間) 『人間失格』 太宰治
(人民) 『人民は弱し、官吏は強し』 星新一
(聖少女) 『聖少女』 倉橋由美子
(青春) 『青春の蹉跎』 石川達三
(雪国) 『雪国』 川端康成
(草の花) 『草の花』 福永武彦
(痴人) 『痴人の愛』 谷崎潤一郎
(点と線) 『点と線』 松本清張
(冬の旅) 『冬の旅』 立原正秋
(忍ぶ川) 『忍ぶ川』 三浦哲也
(風立) 『風立ちぬ・美しい村』 堀辰男
(放浪記) 『放浪記』 林芙美子
(野火) 『野火』 大岡昇平
(野菊) 『野菊の墓』 伊藤左千夫
(友情) 『友情』 武者小路実篤
(路傍) 『路傍の石』 山本有三
(楡家) 『楡家の人びと』 北杜夫
(檸檬) 『檸檬』 梶井基次郎

参考文献

- 奥田靖雄1996「文のこと-その分類をめぐる-」(『教育国語』2-22 むぎ書房)
- 工藤浩1983「程度副詞をめぐる」(『副用語の研究』明治書院)
- 1996「「どうしても」考」(『日本語文法の諸問題』ひつじ書房)
- 工藤真由美1999「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」(『現代日本語研究』6号 大阪大学
日本語学講座)
- 近藤泰弘1997「否定と呼応する副詞について」(『日本語文法-体系と方法-』ひつじ書房)
- 鈴木重幸1972『日本語文法形態論』むぎ書房
- 鈴木英夫1995「新漢語の受け入れについて-「全然」を例として-」(『国語研究』明治書院)
- 1997「「全く」の用法の推移と副詞としての特性について」(『国語学論集』明治書院)
- 服部匡1993「副詞「あまり(あんまり)」について」(『同志社女子大学学術研究年報』44-4)
- 原田登美1982「否定との関係による副詞の4分類」(『国語学』128)
- 森田良行1977『基礎日本語1』角川書店
- 1980『基礎日本語2』角川書店
- 1984『基礎日本語3』角川書店